

令和元年度 第1回 にかほ市総合教育会議 会議録

1. 期 日 令和元年11月8日 金曜日
2. 場 所 象潟庁舎 2階 大会議室
3. 開 会 午後2時57分
4. 閉 会 午後4時7分
5. 出席委員 市長 市川 雄次 教育長 齋藤 光正 教育長職務代理者 佐々木 郁子
教育委員 吉泉 聡 教育委員 小松 雅子 教育委員 伊藤 知
6. 事務局および説明のための出席者
教育次長 齋藤 一樹 総務部総務課長 佐々木 俊孝
教育総務課長 池田 智成 学校教育課長 菊地 新吾
生涯学習課長 竹内 健 文化財保護課長 今野 和彦
教育総務課教育総務班長 相馬 央
7. 案 件 (1) 俳句のまちづくり(仁賀保高校編)について
(2) 泉佐野市との教育文化協定について
(3) その他

【開会 午後2時57分】

○事務局（佐々木 総務課長）

ご多忙のところ会議にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。予定の時間の前ではございますけれども、皆さんお揃いでございますので、これより令和元年度第1回にかほ市総合教育会議を開会いたします。開会にあたりまして、市川市長より挨拶を申し上げます。

○市川 市長

改めまして皆さんこんにちは。まず開会に先立ちまして、一言お詫び方々申し上げたいと思います。もうすでに教育委員会の議事で、お話をさせていただいているかと思いますが、教育委員会の職員におきましては不適切な事務処理を行ったということで、先般、教育長名において処分をさせていただいておりました。これにつきましては、私共、市全体の問題として、改めて気を引き締めて取り組んで参りたいと思いますので、何卒ご理解のほどをよろしくお願ひしたいと思います。改めまして、お詫びを申し上げます。

では開会にあたりまして、私から一言ご挨拶を申し上げます。まずもって、今日の総合教育会議開催にあたりまして、お集りいただきましたことに、誠に感謝を申し上げます。今日の会議の協議案件といたしまして(1)(2)とありますが、いずれにしろ、市の教育行政において、皆様には日頃からご尽力ご協力いただいておりますことに対して、改めて感謝を申し上げます。他方で皆さんにはもう既に聞き及んでいると思いますが、改めて私のほうから申し上げたい

ことが一つありまして、今日のテーマの(1)に仁賀保高校編とありますが、本来は県の教育委員会の管轄ではありますけれども、仁賀保高校の存続ということについて、いま一生懸命、私共、取り組もうとしているところであります。その前提というわけではありませんけれども、今年の1月には仁賀保高校と連携協定を結びまして、高校側も一生懸命協力していただきながら、各種事業を実施しているということでありまして、仁賀保高校の存続そのものが、にかほ市にとっての至上命題であると、私も理解しておりますので、これについては全力を尽くして頑張っていきたいと思っております。つきましては、これからは市の教育委員会の皆さんにも、いろいろとご協力いただくことが出てくると思います。その際には、ぜひとも皆様にもお知恵を拝借させていただきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願ひしたいと思ひます。本日は、ご参集いただきましたことに改めて感謝を申し上げながら、会議を進めさせていただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

○事務局（佐々木 総務課長）

ありがとうございました。次に齋藤教育長より挨拶をお願いします。

○齋藤 教育長

教育委員会を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。歌人でありまして、山上憶良という方はこんな歌を歌っておりました。「銀も金も玉も何せむに勝れる宝子も及かめやも」という歌です。この歌は、子どものことを思って歌った歌だそうです。昔の人々は日常の生活が苦しいながらも、元気に跳ねまわる子どもこそ何よりの宝だという風に捉えながら、希望を抱き心豊かな暮らしを送っていたことを、この歌に歌っているとされておりまして。この歌は千年以上も前に読まれた古の歌ですが、この読み込まれた思いというのは現代にも通ずるものがあるような気がいたします。いま学校をまわっていると、元気に跳ねまわっている子どもたちの様子を見て、まさに宝のように感じるし、また、これからも大事にしてあげたいという気持ちが自然に湧き上がってまいります。ところが、今の社会はこの勝れる宝であるかけがえのない子どもの命が、簡単に失われるという状況であります。テレビや新聞等で、いじめ、自殺、虐待、不登校、親の子殺し、これでもかというほど、毎日のように悲しい事案が報道されています。私は思うに、この人間の世界では、見えないけれども切っても切れない家族の絆というものが、間違いなく存在しているような感じがいたします。その家族の絆によって育てられた命というものは、昔から脈々と受け継がれているものだろうと思ひます。その家族の絆に気づき、改めて家族の絆を考えて、この時に初めて人の心は豊かに成長し、他人に対しても、優しく温かい態度で接することができるようになるものだという風にされておりまして。やはり凶悪犯罪をする少年少女、または子どもを誘拐する大人、自分の子どもを虐待し殺してしまうお母さんやお父さんたち、そういう人方は、家族の絆において育てられた命というものを、受け継がれていなかったのではないかという風に私は考えてしまいます。つまり、愛されたことのない環境で育ちますと、人を愛するということがどういうことかとか、人に対して、優しく温かい態度で接することはどういうことかとか知らないで、育ててしまうのではないかと思ひてしまいます。今こそ家族の絆を大事にしながら、これからにかほ市を背負っていく、または担っていく子どもたちに、温かい心と、困難に負けない心の強さを育てていきたいなと考えています。今日、学校訪問が終わりました。そのことを強く感じまして、また、にかほ市の持つ豊かな自然とか、歴史文化とか、そういう多様な資源を最大限

に活用しながら、子どもたちに人間として身につけておきたい基礎基本、それから、周りを活かして人を育ていける人間性とか、厚い壁にあたってもそれに耐えながら、少しずつ乗り越えていける根気強さ、感謝、優しさ、思いやりに富んだ豊かな心というものも身に付けていきたいという風に考えております。今回は、人づくり、または地域づくりという視点から、まず提案をさせていただきたいと思います。予算も絡みますので、市長のお考えをお聞かせいただければありがたいと思います。皆さんよろしく願いいたします。以上です。

○事務局（佐々木総務課長）

ありがとうございました。

（配付資料について説明）

それでは、これより案件の協議に入ります。進行につきましては、にかほ市総合教育会議設置要項第五条の規定によりまして、市長が会議の議長となりますので、これからは市川市長が進行いたします。よろしく願いいたします。

○市川 市長

それでは早速、私のほうで進行をしながら、協議に入りたいと思います。はじめに(1)の俳句のまちづくりについてを議題とさせていただきます。事務局から説明をお願いいたします。

○竹内 生涯学習課長

（事業について説明）

○市川 市長

説明が終わりましたので、俳句のまちづくりについて、皆さんからのご質問やご意見、あるいは確認されたいことがありましたらお伺いしたいと思います。

○小松 委員

仁賀保高校さんのほうではどんなご意見なのでしょう。

○竹内 生涯学習課長

まだ確認は、これからです。

○小松 委員

わかりました。では全校生徒が対象なのですか、それとも部活じゃないですけども、一部の有志？授業をするということは全校1年生から3年生まででしょうか。

○竹内 生涯学習課長

1年生から3年生までです。

○小松 委員

全然打診もしてないのですか。

○齋藤 教育次長

仁賀保高校の校長先生と、前にいろんな面でいろいろ授業について、お話したことはあるのですが、その際に、奥の細道とかそういうお話を高校でいただければな、と話はされてはいました。俳句についても、取り組むのは悪いことではないなという感じでした。

○伊藤 委員

一つが、先ほど冒頭市長が言ったとおり仁賀保高校は県立ですので、我々にかほ市がやるというのは、まず考えている話なのだけれども、いずれ、仁賀保高校とにかほ市の連携をどう強化していくかっていうのが一番の主眼だと思います。反対をするものではないですが、ただ、小松委員が言ったように、打診はしていない、授業の中で探求の時間はあるから、そこを向けてもらおう。それを一方的に、探究の時間を俳句のほうに充てると、一概に簡単に言っているのかというのが一つ。

時数は、宮本先生が来るのは何時間を考えているのか。果たして一時間授業でもう俳句作れますよという状況になるのか。となれば、ある程度の時数は必要になってくるだろうと。何時間くらい必要かと考えているのかが一つ。

それから夏井先生、かなり売れているので、日程的にどう考えているのか。簡単に、有名だから呼んでみよう、というような考えで果たしていいのかどうか、それも含めてどう考えているのか。

○齋藤 教育次長

探求の時間に関しましては、今回、いろいろ郷土芸能関係についても仁賀保高校と話をしたときに、探求の時間にやってみましょう、ということで進んでいるところがあります。今年度から、伝承芸能関係を仁賀保高校としても学ぶという時間を取っていただいておりますので、そういうことも含めて、探求の時間であればこういう感じも可能ではないかな、ということ踏まえての今回の提案でございます。

それから、夏井いつき先生についてでございますけれども、なぜ夏井先生を今回お願いするかということに関しましては、夏井先生が俳句甲子園にすごく関わっていて、こういうものの運営を始めたのが、夏井先生でもありまして、そういうことも含めて、仁賀保高校生に俳句甲子園というのはどういうものか教えていただきたいということと、俳句作りを指導していただきたいということで、夏井先生に白羽の矢をたてたわけでございます。実は昨年度から、今年が奥の細道 330 年ということで、夏井先生を呼んで仁賀保高校での俳句作りみたいなものを企画はしてきたのですが、日程的に取れなかったものですから、今年度はそれが実現できなかったことがあるわけですが、今年、羽黒大会の選者をされていまして、その際に、にかほ市のかたも「ぜひにかほ市でもこういうのをお願いしたい」という話はしたみたいで、その時に象潟のこともある程度ご存じのところもありまして、「いいですね」という話がありましたよ、とは聞いてはいます。今回、これからあたるのであれば、やはり忙しい先生ですので、そう簡単にはいかないとは思いますが、そういう意味で根強くアピールして、先生に來られるときという形で、やっていくのを始めてもよろしいかなというところがあります。それから俳句を学ぶことであり

ますが、なぜにかほ市がこんなに力をいれているのかを、背景も含めて、仁賀保高校に周知していきたいし、それから俳句づくりはすぐできるものではないでしょうけれども、だいたい小・中学校の頃から、俳句のことについてはいろいろ学んでいると思いますので、各学年どういう時間帯でやるかは分かりませんが、1・2回は講座をして、俳句作りの基本的なことを覚えていただいて、その上で俳句を出していただいて、夏井先生がいらした時に、先ほどありましたように、仁賀保高校で公開でこういうところが良い悪いっていうところを。もし夏井先生が都合つかなければ、他の先生もいろいろ考えていってもいいのではないかとってはいるわけですが、そういう形で、ある程度探求の時間を利用して、俳句を作る雰囲気、習慣をどんどん高校生に持っていて、いずれこういうところに発表して、審査していければなと思っています。

○伊藤 委員

この探求の時間を活用するっていうのは、非常に仁賀保高校の協力もあって、できると思うのだけれども、竹内課長がさっき言った「一過性のものにしたくない」と。今年やっている郷土芸能活動に関して今度どうなるのと。それは今年度で終わっていいの？という話になってくるのだけれども、高校生たちは一年一年変わっていくわけなので、にかほ市の絆を深めていくために郷土芸能をやってみた、並行してやらなくちゃいけないと。じゃあその時数を取ってくれるのか、ということも出てくるわけです。時数を取るのは、私は非常に厳しいと思うので、今やっているものを継続するというのも一つの手だろうし、これが俳句の方に繋がってくるのかと。もしかするとこれも一過性に終わってしまうのではないかと竹内課長が心配しているのが現実になるのではないかな、という感じがするのだけれども、郷土芸能の方はどうするのですか。

○齋藤 教育次長

郷土芸能も、今年度にもまずいろいろ学んでもらって、笛とか、そういうのを体験してもらって、また来年度からもやっていくということで話はなっています。

○伊藤 委員

そうなったときの探求時間というのを、仁賀保高校の方で確保してくれるの？という話。俳句に関して。さっき質問したその俳句の授業は、何時間あれば子どもたちが作れるようになるの？

○齋藤 教育次長

探求の時間がいいのかどうかはありますけれども、学ぶ時間は取っていけるのではと思っています。

○伊藤 委員

郷土芸能っていうのは、まず一年間通してやれるものじゃないですか。この俳句に関しては着地点が6月になっているでしょう。4月っていうのはほとんどそういう時間は充てられないと思うので、ほぼ5・6月、それで大丈夫なのかって心配があるのだけれど。

○齋藤 教育次長

今考えていたのは、例えば4・5月がこういう俳句がありまして、そのあとに探求の時間で、「いちじくいち」というのを取り組んでいるところがあるのですが、それが8・9・10月だとかですね。伝承芸能の関係は例えば冬だとか、今そういう形になっているところもありますので、その辺を考慮して、4・5月ではないかというのを組んだところはあります。

○佐々木 委員

一つのことをするにはある程度の柱、これはどこが主催になるのかというところだと思います。今のところだと、教育委員会が柱ということなのだと思いますけれども、ひとつのプロジェクトをきちんと立ち上げて、土台をしっかりして、高校にも俳句クラブというものはないでしょうか。

○齋藤 教育次長

ないですね。

○佐々木 委員

それがあればね。申し訳ないけれど、大人たちがやりたいやりたいと言ってやれるものでもない、子どもたちの力っていうのはすごく大きいと思いますけど、意欲がなければ成り立たないものだと思うので、小松委員さんもお話したように向こうの方にもお話して、盛り上げていく仕掛人は市役所の人だとしても、実際にやって頑張るのは高校生の俳句大会だとすれば、そっちのほうに力を入れる感じで、ほんとにこれはすごく大掛かりなプロジェクトだと思います。やってみようことには賛成しますけれども、やはり事細かに一つずつ、下の方から積み上げていくものも必要だし、6月・何月っていう大きな一つの目標を持つのも必要だし。だけどもちょっと厳しさがあるような気がします。今の段階から来年にはこれに向けてっていうことなので。

○齋藤 教育次長

いずれ少しずつ計画しながら、こういうものに向かっていきましょうというのであれば、具体的に少しずつ、いきなりっていうのは難しいかもしれませんが、歩んでいけばなどは思っています。

○佐々木 委員

言葉は悪いけど、まず「たたき台」にさせてもらうっていうこともあって、まずはね。

○小松 委員

そうすると、そちらのお考えでは、高校の探求の授業が週1回とかあるのですよね。月に4回くらいはあるのですか？

○齋藤 次長

月2回です。

○小松 委員

月 2 時間で 8・9・10 月？いちじくいちの時も、仁賀保高校の生徒さんとても活躍されて、あの場合は人と触れ合いもあるし、売れたとか売れないとか、いろいろ実体験として、写真を見てもいい顔をして写っていたので、いいのだと思います。8・9・10 月に向かって、お祭りの準備みたいな感じですよ。芸能は芸能で。それで 5・6・7 月で俳句はちょっと無理だと…。秋田高校の子たちも出ますが、文芸部でずっと毎日文章を書いている子たちが出るし、この俳句の甲子園を、ちょっとテレビで見たことがあるのですが、おそらく太刀打ちできません。先ほど高校生クイズのお話をされましたけど、私予選から見に行っていたのですが、あの当時と今のクイズは全然違います。今のクイズは、はっきり言ってゲームです。なので偏差値もなにも関係ないです。前はちゃんと、普通の勉強ができないと上に上がれなくて、かなり上に上がって少数になった段階で初めてゲームが出るので、ある程度ばらつきがでるのですが、今のは最初からゲームなので、昔の高校生クイズとは別物になっています。だから俳句の甲子園は比べられないほどレベルが高いものです。もしこれを息の長いものにしたいのであれば、先ほどおっしゃった文芸部みたいな俳句クラブを作って、外部講師として宮本先生に土台をしっかり作っていただいて、ある程度恥ずかしくないものになった段階で夏井先生に出していただくという形のほうが、息が長いのではないかと思います。あんまり最初から打ち上げず、地道に積み上げて行って、生徒たちも自信ができれば夏井先生とかになさったほうが、ちょっと時間がかかって、今のものにはならないかもしれないですが、そのほうが確実ではないかと個人の意見として思いました。

○伊藤 委員

現状を確認したいのだけれども、例えば今小学生・中学生が投句しているじゃない、それって、学校側から松尾芭蕉の歴史の勉強をして、俳句ってこういうものだよって指導をして、教育をして、提出させているのか、それとも好きな人が出してって、どっちなの？正直なところ。

○菊地 学校教育課長

俳句のコンクール含め、各種コンクールがありすぎて、授業のなかで扱うということが、まずできない状況にあるのが実情です。ですから、こういうコンクールに出品する際は、例えば俳句の場合、季語があるので作った季節が問われるわけですが、一回授業で扱った句を貯めておいていろんなコンクールに出すパターンと、そのつど宿題で出すパターンとあるということです。それは学校によって、指導者によって違うということです。ちなみに俳句の授業につきましては、国語の授業でありますので、必ず 6 年間で一回は基本を押さえるということにはできています。

○伊藤 委員

論点が変わってしまって申し訳なかったです。心配しているのが、高校生にそうやったときに、出してくれるのが少し心配です。仁賀保高校で授業をして、出せよと強制的にやるのか、そうしたときに、本当に生きている句というのが出てくるのか、それこそ小松委員が言ったみたいに、なんでもいいやつばかり出てきて、レベルの低いものになってしまうと、恥ずかしい思いもするだろうし、それがちょっと心配かなと。

○佐々木 委員

こういった会議に私たちも参加させていただいて、今度また、高校の生徒会長とかそういう方々をいれての会議もしたり、その生徒会長は1年でまず終わるかもしれないのだけど、絶対に仁賀保高校に残すのだと、何かを持って、それが繋がれば。高校を通しての、これだけは秀でるものがあるっていう意識付けをすることができるように、私たちも協力することになるのだろうと思うのだけど、まずそういう方々を今度巻き込んで、芸能とかも巻き込んで、一つの大きなものにしていくというような形をとらないと、土台がないとやっぱり大変だと思います。

○市川 市長

私からも一言なのですが、ちょっと提案するにはあまりにも雑だなぁという感じはします。いまの高校の実態というのを、どういうカリキュラムで、どういう感じになっていて、にかほ市とどういうことをやっているのかを押さえた上でやっていただかないと、雰囲気も総合政策課に聞いていただけないかな。自分たちのとこの提案だけじゃなくて、全体の状況の把握をした上でやっていただきたいなと思います。今おっしゃったように、これは学校全体でやる内容じゃなくて、文化・芸能部みたいなのがやるべき内容だから。そうしないと長続きしないからと思って、私も聞いていましたので、事業として遂行していくには、ちょっと粗すぎるなぁという感じがします。しかも伝承芸能について話をしていますが、私も実は授業の枠内でやることについては、反対なのです。それだと続かないと思っています。できれば伝承芸能部みたいな同好会を作っただけで、やってもらいたかったというのはあるのだけれども、いずれ学校側で反応してくれたことについて、私はそれに対してもう否定することはできないので、まずやっていただきますが、今回は全体として厳しい計画だし、計画としても成り立ってない。なのでもう一度差し戻しですね。もう一度やるならば、ゼロからのスタートということで。学校側とのすり合わせもしてない上では、学校側もちょっとこれは受けないと思います。現実問題ですね、そこもちょっと理解していただいた方がいいと思いますので。ただ、案として、こうやってやりたいということについては、私は否定するものではないので。教育委員会の皆さんも意気込みというか、やらなきゃいけないという使命感といいたし、このことについては、非常にご理解いただいているという風に話を聞いて思いましたので、また別の形で考えていくのも一つの方法だと思いますので、俳句に対する市の取り組みについて、ご検討いただきたいという風に私は思いました。

他にありませんか。なければ(1)については終わりとさせていただいて、(2)の泉佐野市との教育文化協定についてを、議題とさせていただきたいと思います。では説明をお願いいたします。

○菊地 学校教育課長

(事業について説明)

○市川 市長

説明が終わりましたので、皆様のご意見・ご質問・ご確認等をお受けしたいと思います。

○吉泉 委員

基本的なことの確認なのですが、現在本市と教育文化協定を結んでいるのは松島だけですね。もう一つは泉佐野市の、「ぜひやろう」というような感触かどうかの確認ですが。

○菊地 学校教育課長

それにつきましては先ほどの仁賀保高校と同じで、一方的な片思いではありますが、実は今月末に、教育長が泉佐野市を訪問されますので、その時に感触をお伺いできるかなと思います。

○小松 委員

一般的に東北の人間は、東京までは行きますけど、それより南にはほとんど行かないし、文化が東と西は全然違うので、ものの考え方もおそらく違うとは思いますが、なので、お互いにショックを与えるという意味では、ちょっと遠くて大変なのですが、いいのではないかと思います。ただやっぱりちょっと遠いので、お金がかかるというのが一番のネックじゃないかと思います。私は二十歳くらいで初めて大阪に行ったのですが、違う国に来たというか外国に行ったくらいのショックがあって、子どもたちも、東京や仙台に修学旅行に行くのとはまた違った意味の、文化的なショックを受けるのではないかなとちょっと期待はします。以上です。

○伊藤 委員

多分この泉佐野市が出てきたのは、北前船の関係だと思うのだけれども、個人的に受け取り方がへそ曲がりなのかもしれないけど、北前船の寄港地の関係で、ただ単に引っ張り出してきたという感覚しかない。全然人口規模が違うし、学校の規模も違うし、それをなぜあえてっていうところがすごく感じる。それで、「大阪の学力が低いからその分の上げ方」「こっちの方が高いから、こっちからの教え方」っていうのは期待できる成果って挙がっているけれども、それ以前に北前船の関係で泉佐野市というだけを引っ張ってきて、こういう協定を結びましょう、ということしか、この資料では正直言って受け取れない。もっとなにか、「泉佐野市にこういう輝くものがあるんだよ」「にかほ市の教育とはまた違ったものがあるんだよ」というものを示してくれれば、いいじゃないという話にはなるのだけれども、インパクトが薄い。ただ単なる理由付けで、ここだと言っているようにしか受け取れない、申し訳ないけれども。もっと違う角度から、にかほ市の子どもたちが本当に成長するために、あるいはにかほ市の先生たちがスキルアップするために、どこかもっといい場所はないのか、ということを考えてほしい。いま協定を結んでいるのが松島なのだけれども、それは災害協定の関係、あるいはにかほ市と松島町の姉妹都市の関係で、まずはその協定を結ぶという形になって、行き来はしているわけですが、そこはそれが前提で行っている。だけど今度は、せつかく結ぶのだったら本当に子どもたちや教師のためになるところと協定を結んでほしいと私は思います。個人的な意見ですが。

○菊地 学校教育課長

正直なところ、そういう受け捉え方は当然だと思っております。実は4年間連続してきた大阪S市と、いよいよ総合交流を始めたいなという風に思っていた矢先、S市の学力があまり上がらなかったということで、視察の予算を今年切られて、今年度は来ないという状況になってしまいました。ですから、できれば今年度も続いていけば、うちの方からも行きたいということと、教

育政策についてお互いに考えていきましょうということで交流できればよかったですけれども、今年度は来ないということで。ところが先般、日野田先生の講演を聞きまして、大阪のほうの教育政策としては、均一ではなくて上位を伸ばす政策というのが行われているという話を聞いて、せっかくこういう縁で結びついたので、大阪のどこでもいいわけではないのですが、そっち方面の教育委員会の教育政策について学ぶ、そして学校ってどういうものだろうか、というのを知りたいなとも思いもありまして、この泉佐野市との案を引っ張り出してきたっていうところであります。

○伊藤 委員

例えば、4年続けて来てくれたけれども、結局は成績が上がらなかった、成果がなかったと。じゃあ泉佐野市の場合にも同じ事が言える可能性がない、とは言えないということも言い切れませぬ。実際に遠くて、当然予算的なものも、これからもしゴーがかかれば、その金額に見合う成果が出るかということが、予算の裏付けになるわけですが、課長として例えば、泉佐野市にかほ市の教職員を派遣した場合、英語の成績がよくなる、あるいは泉佐野市の小学生の全国以下のものが上がる、という自信はあるのか、というのが一番の費用対効果という形になってくるわけですが、協定を結ぶということは、1年2年で終わる問題ではないので、当然お互いメリットが出てこないと続かない問題なので、協定を結んで1年で破棄した、という話ではないと思うのですが、そこらへんをもうちょっと詰めてみたときに、どういう捉え方を我々がしたらいいのか。冒頭に言った、北前船との関係で引っ張って出てきた話にしかなれないのだけれども。そのへんどうなのでしょう。

○菊地 学校教育課長

まず北前船の繋がりだけで申しますと、市民の交流が進んでいますので、それでいいのかなという風に感じています。あと、協定を結ぶうんぬんというよりは、結ぶ前に、もし可能であれば情報をもっと収集して、どのような学力実態なのかということは、調べてみなければいけなかったのかなと非常に反省はしております。ちょっと先方の教育委員会に聞けばいい話だったので、そこについては落ち度という実感です。ただ私が今回提案した事業計画を見ていただければわかるとおり、一気に進めるということではなく、感触をみながらとっていましたので、協定という部分に関しては時期尚早だったかなと感じてはいますが、こちらとしても、それこそ上位を伸ばす手立てとか、グローバルな物の見方という点では、教員に足りない部分がありますので、何らかの形で研修を深めていかなければいけないことも事実です。もっと精査して、教育長が訪問なされたお話をお伺いしてから、また再考していくということで、可能であればやっていきたいなと思っています。ただ、高校入学準備金給付制度なんかは面白いなと思って調べてみました。こういうのは参考になるかなと思っていますので、ここは仁賀保高校も視野に入れています。特認校制度というのは、学校を自由に選べる制度です。ただ、小学校は13校あるうちの3校、小規模校でやっているということです。各学校の特色を見て、保護者がこの制度を使うということですので、興味深い制度だなと思っていますのも確かにあります。

○佐々木 委員

泉佐野市に教育長が行かれるということなので、一応感触というのはわかると思いますので、そこらへんを聞きながら。ただ、子どもたちの向上を、もうちょっといろんな面から、どのようなことをすることが今のにかほの子どもたちにとって良いかなということを考えて、この議案だと思っていますので、そのことについてはとても有難いと思います。こういうことの積み重ねが、より良い協定に近づいていくのかなという風に思いますので、また視野を広げていていただきたいと思っています。

○小松 委員

泉佐野市が適当かどうかは私もわかりませんが、学力向上のために先生方に他のところを視察していただいて、ちょっとぬるま湯にお湯を入れていただきたい気持ちはあります。今まで全国学力テストは秋田が良いので、先生方の全国からの視察が多かったという話がありますが、どうも最近人気は他の県に移って、「今までの秋田方式はちょっとね」という全国の先生方のお話を他所から聞きました。そういうことも踏まえて、今の私たちのやっている方針と全く違うところを、別に教育委員が行かなくてもいいので、教育長にあちこち行っていただいて、教育長がここがいいのじゃないか、とおっしゃったところとこういう事業を進めていただくのもいいと思うので、大変申し訳ないのですが、いろいろ調べていただければ有難いと思います。でもすごくいいことだと思います。よろしくお願いします。

○市川 市長

他にありませんか、では私から。

泉佐野市と私共の経済協定というか、振興協定を結んでいますので、それに基づいて泉佐野市というのをターゲットにしたのだと思います。泉佐野市は多分話をすれば乗ってくると思います。しかしながら事業をしたときの狙いを、今回はどこに捉えるのかということをしっかりしないと、事業の効果を検証できないと思いますので、どのような効果を目指していくのかを明確にしないと、伊藤委員のおっしゃるような疑問にぶち当たっていくのかという感じはします。しかしながら、小松委員と佐々木委員がおっしゃるように、事業計画そのものとしては非常に多様性もありまして面白いものではあるなというふうな雰囲気はあります。子どもたち全員を対象にするのか、一部にするのか、あるいは3ヶ年計画で進めていくなかで、効果をちゃんと設定しないと、どういう事業内容になっていくのかははっきりしないと思いますので、そこらへんは何とかお願いしながら。決して皆さんが前に進むことを否定しているわけではないので、教育長が行かれるということで、感触を掴んでいただきながら、事業が進められるかどうか、スタートラインにたてるかどうかを模索してもらいたいなと思います。いずれにしろ、大阪に行くのは確かにお金がかかります。仮に仙台と新潟から出ているピーチを使ったとしても、時間的に一日では厳しいので、一泊しなければならぬのかなと思いますが、もし仮にやるならば、他の事業かなにかにくっつけて仙台まで行って、その人たちももう一足繋げるとか、そういうことも考えられると思うので。まずはスタートに立つか立たないか、ということですので、いったん教育長にお願いしながらやっていただきたいと思います。相手の反応が良くなければ無理強いすることもできませんので、お願いしたいと思います。

他に、よろしいでしょうか。ではこの件については、以上とさせていただきます。

(3)その他となりますけれども、なにかございますか。

(なしの声)

○市川 市長

では以上にさせていただきたいと思います。これにて会議を閉じたいと思います。大変ありがとうございました。

【閉会 午後4時7分】